

朝鮮肅宗三十四年描画入り『坤輿萬國全圖』攷

鈴木 信 昭

キーワード

朝鮮地図学史 マテオ・リッチ 坤輿萬國全圖

はじめに

二〇〇一年九月、史料調査のため大韓民国を訪れた際に、ソウル大学校奎章閣に所蔵する写真に写された描画入り『坤輿萬國全圖』を閲覧する機会があった。そもそもこの度の訪韓の目的は、ソウル市内切頭山にあるカトリック殉教者記念館が所蔵するイエズス会士フェルビースト(Ferdinandus Verbiest 漢名は南懷仁、一六二三～一六八八年)著述の『坤輿全圖』(原本の刊年は中国康熙十三「一六七四」年であるが、同記念館所蔵のものは咸豊六「一八五六」年の広東重刊本である)を閲覧することにあつた。しかし、訪韓中に『坤

輿全圖』と同様に、世界図の中に奇怪な海獣や動物、船舶が描画されているマテオ・リッチ(Matteo Ricci 漢名は利瑪竇、一五五二～一六一〇年)の世界図『坤輿萬國全圖』がソウル大学校奎章閣で所蔵していると知つたため、急遽同館を訪れ、閲覧したのである。

ところで、このソウル大学校奎章閣所蔵の写真に写っている大型の屏風に仕立てられた描画入り『坤輿萬國全圖』は、朝鮮肅宗三十四(一七〇八)年の作成年と当時領議政であつた崔錫鼎署名の跋文を有する来歴の明確な世界図であり、同様な世界図はこれまでにソウル大学校博物館と大阪南蛮文化館でそれぞれ所蔵していることが確認されてい

る。しかし、ソウル大学校奎章閣所蔵の写真版『坤輿萬國全圖』は、写真版とはいえ、広く学界に知られておらず、さらにはこれまでのソウル大学校博物館や大阪南蛮文化館が所蔵する描画入り『坤輿萬國全圖』諸本と少なからず相違が見られ注目されるのである。

そのため本稿では、ソウル大学校奎章閣所蔵の写真版描画入り『坤輿萬國全圖』の形態と内容を探り、その上でこれまで現存が確認されるソウル大学校博物館と大阪南蛮文化館所蔵の『坤輿萬國全圖』諸本との書誌学的な比較検討をおこないながら、描画入り『坤輿萬國全圖』の作成された経緯、及びその過程を考察して、さらには朝鮮王朝社会にあたえたマテオ・リッチ世界図の影響についても明らかにしたいと考える。

一、マテオ・リッチ『坤輿萬國全圖』諸版本

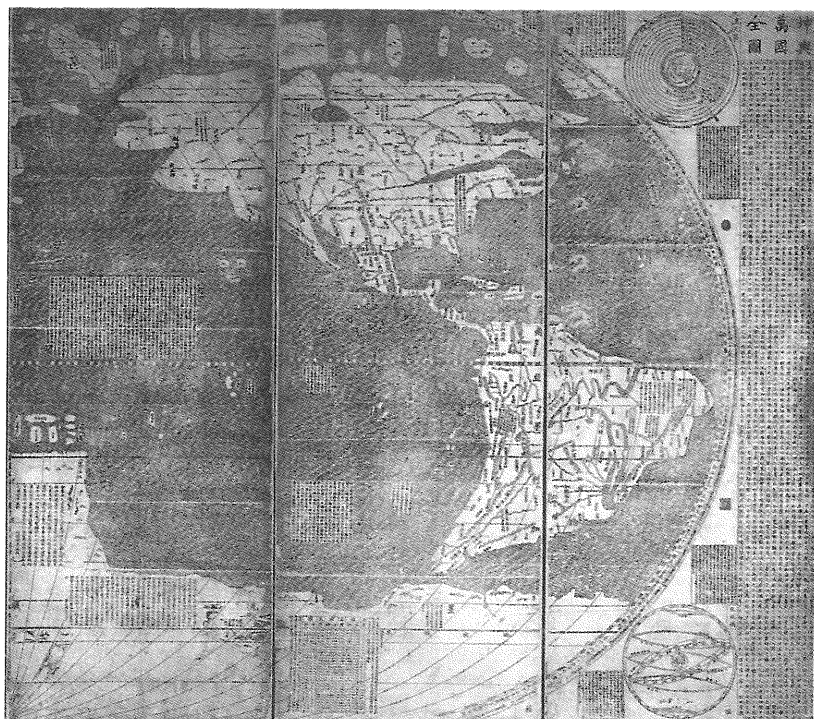
ソウル大学校奎章閣が所蔵する写真版描画入り『坤輿萬國全圖』の詳細について述べる前に、マテオ・リッチの世界図刊行の過程について、特に世界図中に挿画が描かれているか否かという点に注目しながら、その変遷をたどってみたい。

周知の如く、マテオ・リッチは中国に滞在していた間に

(一五八三年に初めて肇慶に滞在した時から一六一〇年に北京で死去する時まで)、数種類の世界図を刊印した。その嚆矢は、中国万曆十二(一五八四)年に肇慶滞在中に刻版した『山海輿地圖』であつたが、その後何回かにわたり改訂・修正が加えられ、万曆三十(一六〇二)年に北京で刊印された世界図が『坤輿萬國全圖』である。⁽¹⁾この世界図は全六幅からなる大型のものであつたが、図中の記載事項がイエズス会の会章以外は全て漢文で著述されていたこともあり、刊行と同時に各地に伝播し、日本や朝鮮の知識人の世界認識にも大きな影響を与えたものである。⁽²⁾⁽³⁾

現在、万曆三十年刊印の原刻版『坤輿萬國全圖』は、欧州のヴァチカン図書館、大英図書館、そして日本の宮城県図書館、京都大学附属図書館(主図にイエズス会の会章なし)、国立公文書館内閣文庫(主図のみ)に所蔵されており、他には原刻本とは異なる明代の別刻本をオーストリア国立図書館で、また清代に入つて改訂されたものがロンドン王立地理協会ですれぞれ所蔵していることが確認されている。⁽⁴⁾ところで、この原刻版『坤輿萬國全圖』は、前述のように全六幅からなる大型の世界図である(図1参照)。第一幅から第六幅にわたり中央に卵形図法による世界図が描かれ、その外側四隅には「九重天圖」とその説明文(第一幅上部)、「天地儀」とその説明文(第一幅下部)、そして正距方位図

朝鮮肅宗三十四年描画入り『坤輿萬國全圖』攷（鈴木）

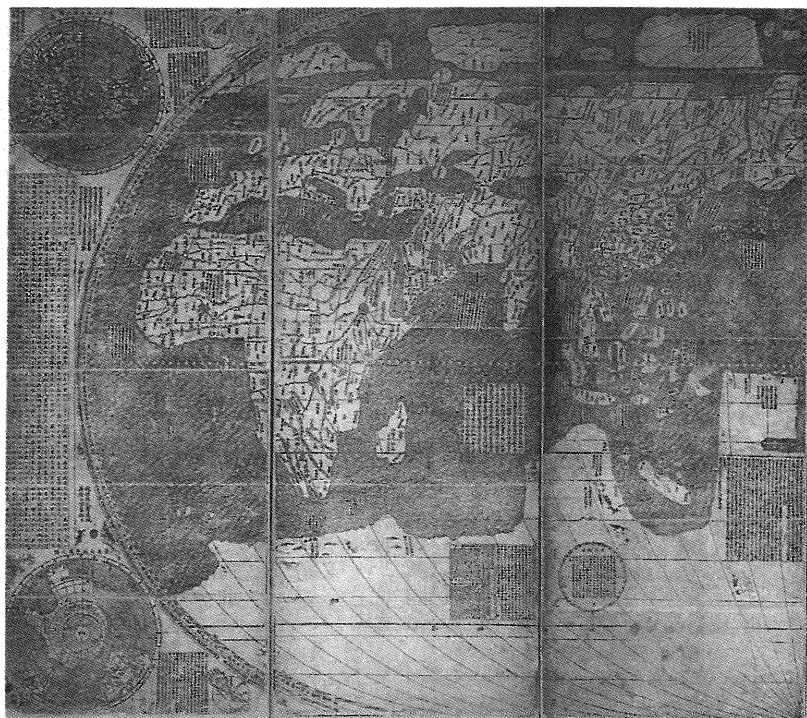


法による「赤道北地半球之圖」と「赤道南地半球之圖」、及び「日蝕圖」「月蝕圖」が第六幅の上部と下部にそれぞれ置かれているものである。イエズス会の会章が第一幅に二カ所、第六幅に一カ所刻印され、また第一幅に「利瑪竇」の序文が著録されている他に、図中には吳中明、李之藻、陳民志、楊景淳、祁祧宗の撰文が散見される。そして第六幅の中央には、二行にわたり「錢塘張文燾過紙／萬曆壬寅孟秋日」なる識語が示されているというような幾つかの特徴を持つ世界図である（世界図の詳細については次項で詳論する）。

この万曆三十年原刻版の『坤輿萬國全圖』は、各地で歓迎された。しかし、リツチは早くも翌年にはその改訂版世界図を刊行した。これがいわゆる全八幅からなる『兩儀玄覽圖』である。

『兩儀玄覽圖』は、『坤輿萬國全圖』の需要があまりに多かったために、新たに刻版されたものであったが、『坤輿萬國全圖』と比較して、その形態・内容共に相違が見られる。

『兩儀玄覽圖』では、『坤輿萬國全圖』の第一幅にあった「九重天圖」が「十一重天圖」に変更され、「日月蝕圖」が削除されていたりというような



（図 I）万曆 30 年原刻版『坤輿萬國全圖』（宮城県図書館所蔵）

図像の改廃、或いは地図中の序文・撰文等の入れ替えが行われている。しかし、『兩儀玄覽圖』の第一幅から第八幅にわたって描かれた卵形図法による世界図の形状、及び地名等の内容は、ほぼ『坤輿萬國全圖』と同じである。但し、本稿の問題点と関連して指摘できることは、原刻版『坤輿萬國全圖』、及び『兩儀玄覽圖』共に、図中に動物・海獣・船舶等の描画が一点も書き入れられていないという特徴を持っていることである。

次にマテオ・リッチの世界図が刻版されたのは、万曆三十二（一六〇四）年である。この世界図は、未だ現存が確認されていない。しかし、リッチの『報告書』によれば、万曆二十八（一六〇〇）年にリッチが南京で刊印した世界図（『山海輿地全圖』を万曆三十二年に貴州巡撫が勝手に縮印したものであるという。そのためこの世界図の作成にはリッチが直接・間接に関わらなかったはずである。これらの点から、当時の中国人の知り得なかったであろう動物や海獣、西洋の帆船がこの世界図に描画されることはなかったと見て大過ないであろう。続いて作成年の明らかなリッチの世界図は、万曆三十六（一六〇八）年刻版の世界図である。こ

の世界図は明朝神宗皇帝の御命によって作成されたものであるために、宮廷版『坤輿萬國全圖』とも呼ばれているものである。この世界図も未だ現存が確認されておらず、その詳細は不明である。しかし、リッチの『報告書』によれば、万曆三十年の原刻版、或いは同年の「刻工某刻版」の『坤輿萬國全圖』を多少手直しして刻印されたものであるよう⁽⁸⁾だ。そのためこの世界図にも描画が書き込まれた可能性は少ないといえよう。このようにリッチの『報告書』を見る限りでは、リッチが描画入り世界図を作成した形跡は見あたらないのである。

ところが、船越昭生氏は、作成年は明らかではないとしながらも、描画が書き込まれた可能性のある『坤輿萬國全圖』を一点指摘している。それはマテオ・リッチの『報告書』にある「神父たちは彩色を加え、繪を描いた多くの世界地圖を若干の人に贈ったことがある。地圖を贈られた太監の誰かがそれを皇帝に差出したが、それが誰であるかは知らない。皇帝はそのでき榮えが立派で、多くの国家が並び、異った風俗を廣く載せていること等、中國人がいまだかつて知らなかったものであるのを見て大いに喜んだ。」という記述をもとにしている。そして、船越昭生氏は、「現存する版本を知らないが、もしも右の記録のごとくあるとするならば、彩色描繪された一本があったということにな

る。」と結論して、作成年を萬曆三十年から同三十六年の間と比定して、その原図をもとにして模写された世界図が、朝鮮肅宗三十四年の崔錫鼎の跋文を持つ描画入り『坤輿萬國全圖』であると推定しているのである⁽⁹⁾。

しかし、船越昭生氏が利用されたリッチ『報告書』は、ヴェントリ神父の編集になるものであり、同じくリッチ『報告書』を校訂したデリア神父によれば、同箇所は「神父たちはその世界図の多くを贈物にしたので、宦官たちの誰がそれにさまざまな彩色を施して国王に献上したのか、わたしにはわからない。国王は多数の王国や、それぞれの珍しい風習を書きこんだその美しい作品を見ると、この王国ではかつて見たこともないものだったので、非常に喜び、もつとほかにもほしいと思った」となっており、甚だ意見の分かれる部分なのである。

そもそもこの文章は、神宗皇帝がいわゆる宮廷版『坤輿萬國全圖』の作成を要請した部分の直前に記載されているものである。もし、船越氏が言われるようにリッチの描画入り『坤輿萬國全圖』が存在したのであれば、この時皇帝が見たものは描画入りの『坤輿萬國全圖』であり、当然の如く神宗皇帝の所望した宮廷版『坤輿萬國全圖』も描画入り『坤輿萬國全圖』でなければならぬはずである。しかし、リッチは、宮廷版『坤輿萬國全圖』の作成にあつ

たつて、描画に関する一切語っていないのである。

このように船越氏が指摘する如く、リッチ作成になる描画入り『坤輿萬國全圖』の存在については甚だ疑問とするものであるが、ヴェントリ神父編集のリッチ『報告書』が誤りであるという論拠を持ち合せているわけではないため、結果的には未だ、万暦三十年から三十六年の間に描画入り『坤輿萬國全圖』が作成された可能性は残るのである。

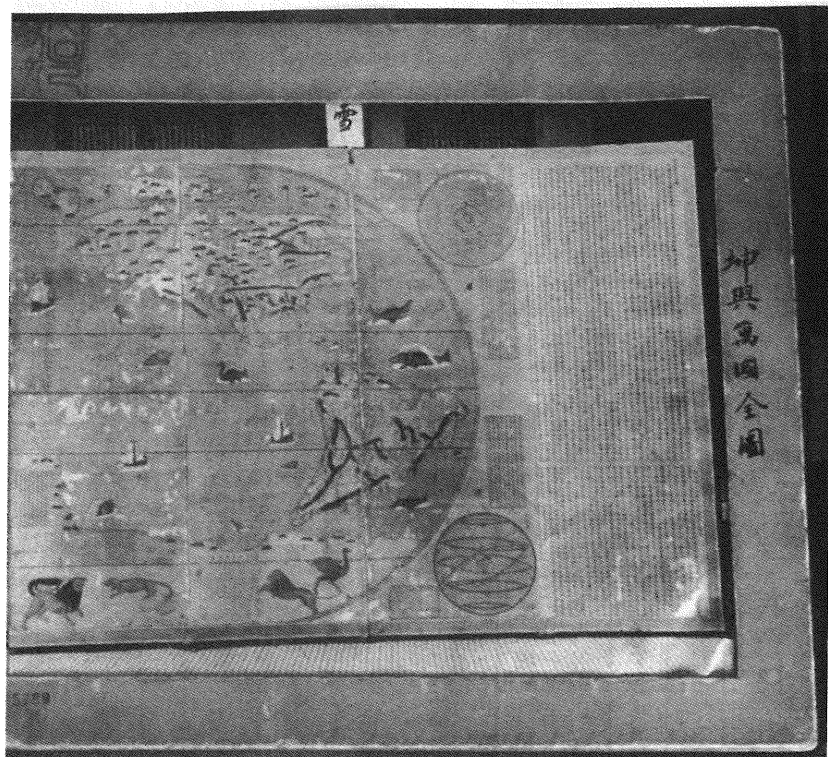
以上、万暦三十年の原刻版『坤輿萬國全圖』と、それ以降に作成されたマテオ・リッチの世界図について推測を含めながら概略してきたが、これらを整理すれば（表Ⅰ）の

（表Ⅰ） 万暦三十年以降に作成されたマテオ・リッチの世界図

	作 成 年	地 図 名	作成地	描 画	備 考
①	万暦三十（一六〇二）年	坤輿萬國全圖	北京	無	宮城県図書館等に所蔵。
②	万暦三十一（一六〇三）年	両儀玄覽圖	北京	無	崇実大学校基督教博物館等に所蔵。
③	万暦三十二（一六〇四）年	山海輿地全圖	貴州	無	万暦二十八年南京刻印版の縮版、現存せず。
④	万暦三十～三十六年	坤輿萬國全圖？	北京	有	現存せず。
⑤	万暦三十六（一六〇八）年	坤輿萬國全圖？	北京	無	①の増訂版、現存せず。

ようになる。

これらマテオ・リッチ世界図の中で、本稿が考察の対象としている描画入り『坤輿萬國全圖』と関連する世界図は、唯一、描画が書き込まれている可能性のある④の世界図である。それでは、ソウル大学校奎章閣で所蔵している写真に写された『坤輿萬國全圖』は、この④の世界図と何らかの関係があつたのであろうか。その問題を探る前に、まず写真に写された『坤輿萬國全圖』の形態、及びその内容について検討してみたい。



二、ソウル大学校奎章閣所蔵の

写真版『坤輿萬國全圖』

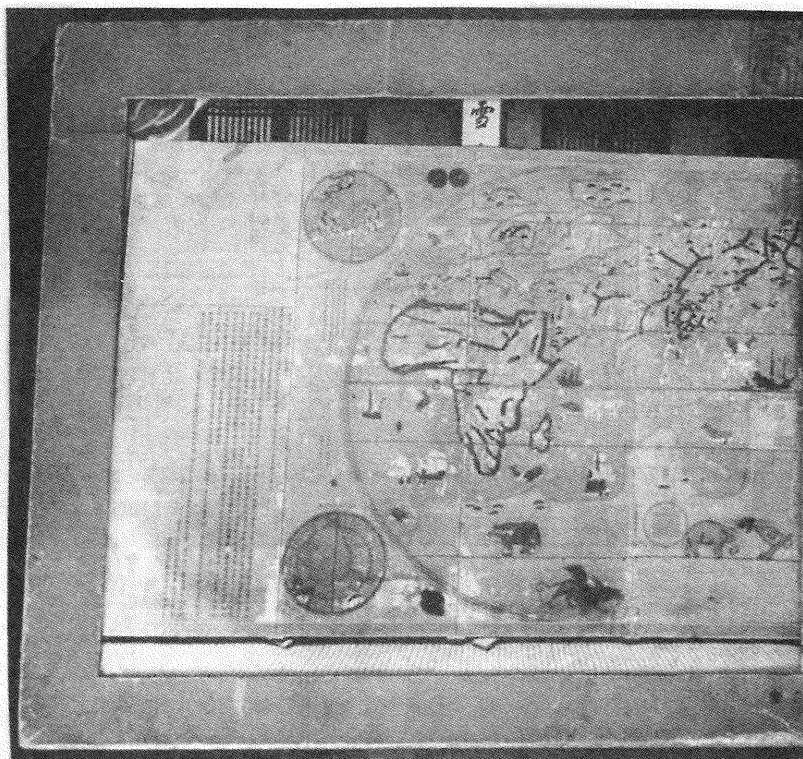
前述したように、ソウル大学校奎章閣が所蔵するマテオ・リッチの世界図は、写真撮影のものではあるが、表題に「坤輿萬國全圖」とあり、図中に動物・海獣・船舶等が描かれていることから、写真版描画入り『坤輿萬國全圖』とでも言い得るものである（以下、同本は奎章閣本と略記する）。

奎章閣本は、一九八〇年刊行の『補訂奎章閣圖書韓國本總目録』（ソウル大学校人文大学附設東亜文化研究所）にはその書名が見えず、一九九四年刊行の『修正版奎章閣圖書韓國本綜合目録』（ソウル大学校奎章閣）に始めて著録されているものである。同目録によれば、奎章閣本について次のような説明がなされている（同目録、下巻、史部地理類、一一八二頁参照）。

坤輿萬國全圖

〔湯若望（獨）作〕〔年紀未詳〕

一枚、寧眞版、29×62 cm



（図Ⅱ）ソウル大学校奎章閣所蔵写真版描画入り『坤輿萬國全圖』

本文中…萬曆壬寅（萬曆三〇、一六〇二、
宣祖三五年）

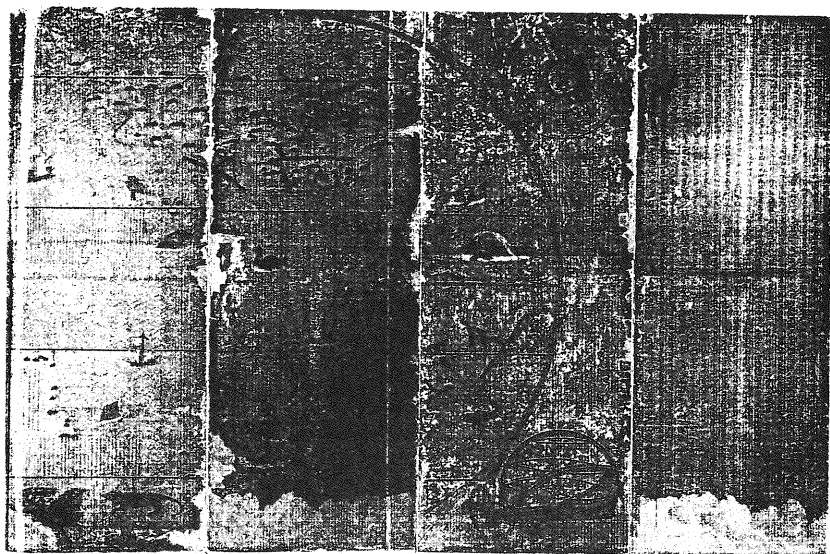
序…戊子秋九月（一七〇八、肅宗三四
年）
（奎 二五二八九）

これらの点から奎章閣本は、一九八〇年以降、一九九四年までの間に、奎章閣未整理本の中から「発見」され、新たに目録化されたものと考えられる。管見の限りでは、奎章閣本が学界に紹介されるようになったのは一九九〇年代半ば以降のことであり、未だ詳細な研究が為されていないのが現状である。

（１）奎章閣本の形態

奎章閣本を図示すれば（図Ⅱ）のようになる。奎章閣本の形態は、縦二九、四センチ×横六二センチの厚紙を額縁の型にして、その内側縦二三・五センチ×横五六センチの中に写真を組み入れたものであり、その写真は、もともと二枚であったものを（屏風中の世界図の第三幅目と第四幅目の間が切れている）一枚につなぎ合わせたものである。

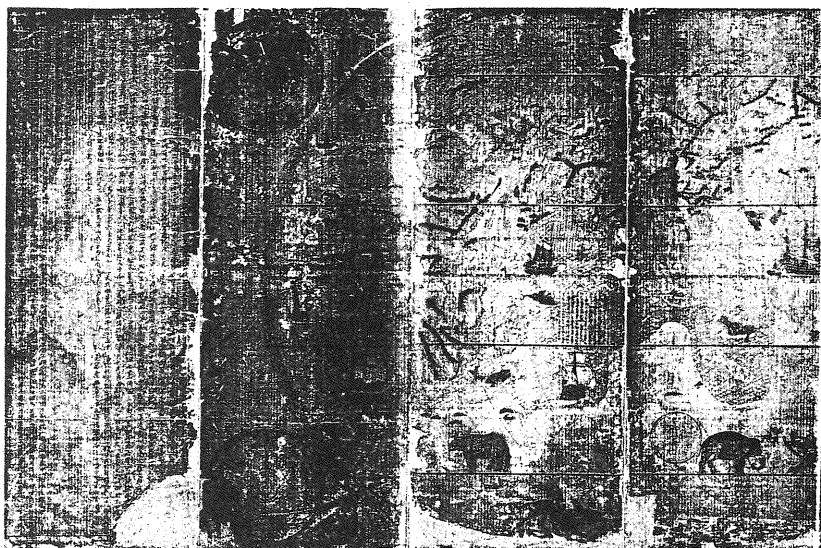
額縁の形となっている厚紙には、右側に縦



書きで「坤輿萬國全圖」と銘記されているだけで、他に書き込みはない（写真の裏には何らかの記載があるのではないかと考えるが、現在のところ不明である）。写真は白黒のものであるが、黄ばみが目立っているため、かなり以前に撮影されたものであることを物語っている。

写真に写された奎章閣本は、全八枚組の屏風に仕立てられており（内容については後述）、屋外にて撮影されたものである。屏風の後方には建物の一部が見え、その柱には中国や朝鮮の寺院や一般の家屋等の柱に掲げられる一対の柱聯が写っている。また、屏風を屋外に持ち出したために、破損を防ぐためか、或いは屏風のバランスを保つためであろうか、屏風の下には敷物が広げられている。この敷物は詳細に見れば、朝鮮で穀物を干すときに使うモンソック（^①망斗）である。これらの点から、この写真は、かなり以前に朝鮮半島内のどこかの屋敷内で撮影されたものであることが明らかとなる。

そもそも崔錫鼎の跋文を含む描画入り『坤輿萬國全圖』が研究者の注目を集めるようになったのは、一九三二年頃のことである。その理由は、同世界図がこの年十月に、京城帝国大学開学記念として同大学附属図書館で開催された「朝鮮古地図の展観」に初めて展示されることになったからである。^②この展示会の展覧目録は、翌年刊行された『青丘



（図Ⅲ）ソウル大学校博物館所蔵描画入り『坤輿萬國全圖』

学叢』一〇号に転載されており、それによれば、朝鮮京畿道楊州郡光陵にある奉先寺と京城帝国大学附属図書館がそれぞれ所蔵していた二点の描画入り『坤輿萬國全圖』の屏風が展示された。京城帝国大学附属図書館所蔵のものは、一九三六年に刊行された朝鮮史編修会編の『朝鮮史』第五編第六卷、肅宗三十四年条の末尾に写真が掲載されており、一見してこの屏風は、現在ソウル大学校博物館で所蔵している描画入り『坤輿萬國全圖』（以下、博物館本と略称する。図Ⅲ参照）であることが明らかである。

また後述するように、現存する大阪南蛮文化館所蔵描画入り『坤輿萬國全圖』（以下、文化館本と略称する）は、発見された時は全十曲であった。こうした事情を勘案すれば、奎章閣本は、元来は奉先寺で所蔵していた描画入り『坤輿萬國全圖』であり、また写真そのものは、一九三二年の展示会「朝鮮古地図の展観」に出展された際に、奉先寺境内で京城帝国大学附属図書館の関係者等によって撮影されたものであると推測することが出来る。

（2）奎章閣本の内容

奎章閣本は、白黒写真のために細部にわたって詳細でないところもあるが、印本ではなく、模写本と見て大過ないであろう。ちなみに現存する博物館本、文化館本はいずれ

も模写本である。また、奎章閣本の彩色の配分についても明確ではないが、白黒の濃淡が数種類にわたっているために、何色かの彩色が施されたことは間違いない¹⁶。

ところで、奎章閣本は三つの部分から成り立っている。

第一の部分は、屏風の第一幅目であり、文章のみが記載されているところである。第一幅の上段一行目には「坤輿萬國全圖」と表題され、その後について、万曆三十年原刻版『坤輿萬國全圖』第一幅にあるマテオ・リッチの序文（原刻版では十二行）が二十三行にわたって転載されている。下段には、原刻版『坤輿萬國全圖』第六幅にあるマテオ・リッチの「論地球比九重天之星遠且大幾何」（原刻版では十行）が二十三行にわたって記載されている。これら文章は、第一幅紙上に引かれた薄い行線にあわせて楷書で書かれており、各行の字数も一定している。ここから、第一幅に転載した文章は、行数や字数を計算の上で清書したことが明らかとなる。

第二の部分は、第二幅から第七幅にわたっており、ここでは卵形図法、いわゆるポルドーネ図法による世界図が描かれている。世界図の形状、地名の表記等は原刻版『坤輿萬國全圖』と同様である。但し、図中の余白部分に動物・海獣・船舶等の描画が多く描かれていることが原刻版『坤輿萬國全圖』と相違している点である。

この第二幅から第七幅にわたる世界図の部分については、屏風の中でも独自の位置をあたえられたものである。なぜならば、第一幅には記載されていなかったが、第二幅から第四幅の下部右側隅にそれぞれ「一幅」、「二幅」、「三幅」の墨書があり、第五幅から第七幅にかけては下部左側隅に「四幅」、「五幅」は摩滅して不明、「六幅」の記載が残っているからである。世界図の部分における「一幅」から「六幅」の記載とその位置についても原刻版『坤輿萬國全圖』と全く同じものである。この点からも全六曲にわたる世界図そのものが原刻版『坤輿萬國全圖』を意識して模写されたものであることは明らかであろう。

なお、第二幅（世界図の「第一幅」にあたる）の上部には、原刻版『坤輿萬國全圖』と同じ「九重天圖」とその説明文、下部には「天地儀」とその説明文があり、またそれぞれの説明文の左側に楕円形と方形の二種類のイエズス会会章が書かれている。この点も原刻版『坤輿萬國全圖』と同じである。

また、第七幅（世界図の「第六幅」にあたる）においては、原刻版『坤輿萬國全圖』と同じように、その上部には、「赤道北地半球之圖」と「日蝕圖」・「月蝕圖」、及び説明文があり、下部には「赤道南地半球之圖」等が描かれている。そしてここには、楕円形のイエズス会会章と「錢塘張文燾

過紙／萬曆壬寅孟秋日」なる識語が記載されているが、これについても原刻版『坤輿萬國全圖』と同様である。

しかし、原刻版『坤輿萬國全圖』と決定的に異なる点は、図中の描画である。なぜならば、前述したように世界図の余白を利用して、かなり多くの図像が描かれているからである。「第一幅」から「第六幅」にわたる南方の大陸「墨瓦臘泥加」の内に、右から「ダチヨウ」、跳びかかろうとする「ライオン」、「ワニ」を思わせる動物、常に子を背に乗せて描かれる「スウ」、樹上の「カメレオン」、「象」、獲物をくわえる「グリフォン」、そして「サイ」というように、実在の動物や空想上の奇獣が描かれている。また海獣は、「第一幅」と「第二幅」の海上にそれぞれ三個、「第三幅」海上には四個、「第四幅」と「第五幅」の海上にはそれぞれ二個、「第六幅」海上には三個が描かれている。

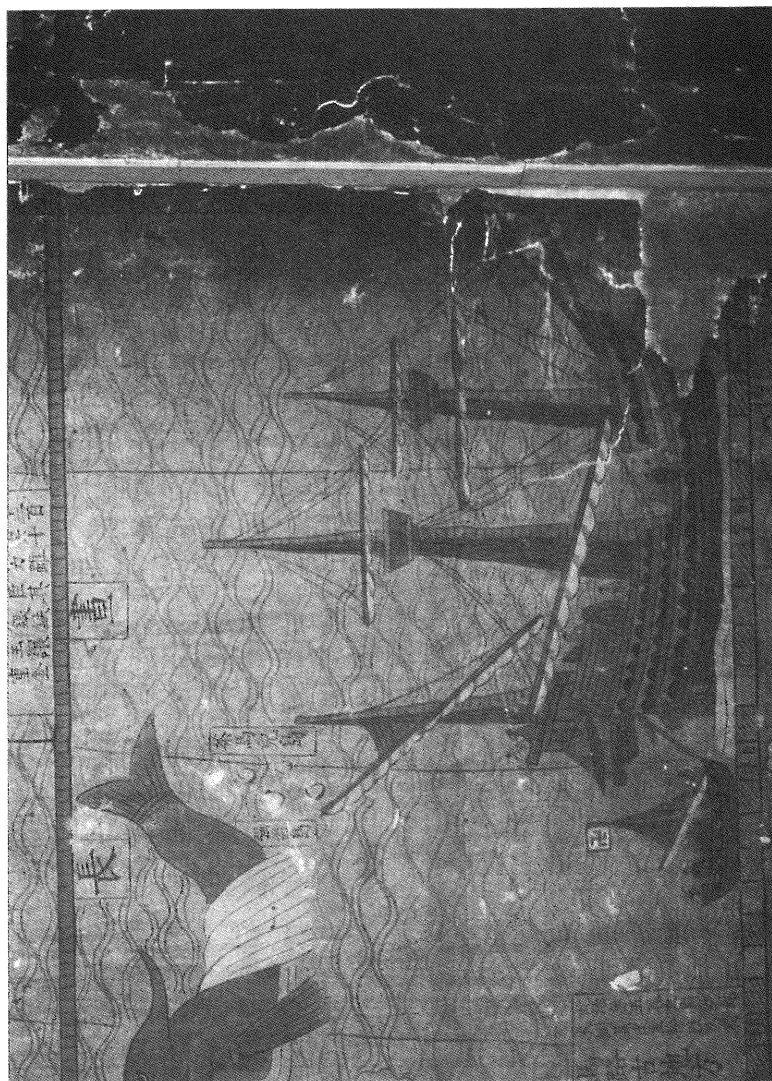
これら「墨瓦臘泥加」大陸の余白に描かれた「サイ」や「象」等の実在の動物は、当時中国で生息していなかったものであり、また怪獣や海獣については、『山海経』を始めとする中国の博物誌的書物中に記載されていないものである。また、船舶は「第二幅」海上に帆船が一艘、「第三幅」海上にも帆船が三艘、「第四幅」海上には、帆をまとめて停泊している大型帆船とその横に繫留した小型の帆船がそれぞれ一艘あり、船上には儒冠と儒服を着た数名の人物が描かれ

ている（図IV参照。奎章閣本では人物の輪郭が特定できなかったため、この部分は博物館所蔵本による）。『第五幅』海上にはジャンク船と帆船がそれぞれ一艘、「第六幅」海上には帆船が二艘描かれている。海上の海獣においても同様であるが、船舶についても、一つとして同じものが描かれていないのが特徴である。

そして、これら帆船のいくつかには「正」や「メ」印をつけた旗がみえる。おそらく描画入り『坤輿萬國全圖』の原図を製作した人物が、実際に見た船上旗をモデルにして描いたものであるが、この目印が当時どのような意味を持つものであったのか、という点については不明である。

以上のように、第二幅（世界図の「第一幅」）から第七幅（世界図の「第六幅」）にかけては、世界図中の動物・海獣・船舶等の描画を別にすれば、それ以外については万暦三十年原刻版『坤輿萬國全圖』とほぼ同じ内容のものと見えるのである。これらの点から、描画入り『坤輿萬國全圖』の作成の目的は、中国人に対して既に刻版されていた原刻版『坤輿萬國全圖』のマテオ・リッチの文章等をそのまま転載することで、世界地理・地誌の案内をすると同時に、未だ中国人の見聞し得ない動物・奇獣・海獣・船舶を描画することで、世界の博物を紹介するために作成されたものではないかと推測することが出来るのである。

朝鮮肅宗三十四年描画入り『坤輿萬國全圖』攷（鈴木）



(図IV) 描画入り『坤輿萬國全圖』の部分図（ソウル大学校博物館所蔵本）

第三の部分は第八幅目である。この部分は原刻版『坤輿萬國全圖』にないものであり、新たに書き加えられたものである。第八幅も第一幅同様に、文章だけが記載されているものであるが、全文を引用すれば次のようになる（①から⑭は行を表す）。

① 西洋乾象坤輿圖二屏總序

② 皇明崇禎初年、西洋人湯若望作乾象坤輿圖作八帖爲屏子、印本傳於東方、

③ 上之三十四年春、書雲監進乾象圖屏子、

④ 上命繼模坤輿圖以進、蓋本監舊有天象分野圖石本、而以北極爲中央、赤道以北躔度無差、赤道以南躔度宜漸窄、而反加闊與

⑤ 上玄本體不侔、今西士爲二圓圈平分天體、一則以北極爲中、一則以南極爲中、以天漢爲無數小星、列宿中、觜・參換置、此與石

⑥ 本不同、而却得天象之真面矣、坤輿圖則古今圖子非一揆、而皆以平面爲地方、以中國聲教所及爲外界、今西士之說、以地球

⑦ 爲主、其言曰、天圓地亦圓、所謂地方者坤道主靜、其德方云爾、仍以一大圓圈爲體、南北加細彎線、（東）西爲橫直線、就地球上下

⑧ 四方分布萬國名目、中國九州在近北界亞細亞地面、其

史苑（第六三卷二號）

說宏闊矯誕、涉於無稽不經、然其學術傳授有自不可率爾下破者、姑

⑨ 當存之以廣異聞、噫乾象圖有 崇禎戊辰字、坤輿圖有

⑩ 大明一統字、而謄焉 中朝世運嬗變、禹封周曆非復舊觀、志士忠臣匪風下泉之思、庸有既乎、臣於是重有感焉、模寫裝屏既訖、

⑪ 略識于左方空幅云、

⑫ 歲次戊子秋九月 日大匡輔國崇祿大夫議政府領議政兼領 經筵弘文館藝文館春秋館觀象監事 世子師臣崔錫鼎拜手謹跋

⑬ 監董官通訓大夫前觀象監正臣李國華

⑭ 通訓大夫前觀象監正臣柳遇昌

上記の屏風の八幅目に書かれた文章によって奎章閣本の來歴を知ることが出来る。

この「西洋乾象坤輿圖二屏總序」と題する跋文は、「戊子秋九月」に「乾象圖」と「坤輿圖」の跋文として著述されたものである。跋文中の「戊子」は、朝鮮國王肅宗三十四（一七〇八）年にあたり、三行目の「上之三十四年」と対応するものである。

そして跋文によれば、描画入り『坤輿萬國全圖』が作成された契機は、肅宗三十四年春に觀象監が國王肅宗に、「崇禎初年（一六二八年）」に湯若望(Adam Schall von Bell,

朝鮮肅宗三十四年描画入り『坤輿萬國全圖』攷（鈴木）

アダム・シャル、一六二一年入華（一六六六年）が作成した「乾象圖」を進呈したところ、肅宗から「坤輿圖」をも模写してそれを天体図に添えるよう御命が下ったためである。そのため観象監では、同年にアダム・シャルが作成した「坤輿圖」をも模写して国王に献上したのである。つまり、奎章閣本に見る世界図は、崇禎初年にアダム・シャルが作成した「坤輿圖」をそのまま模写したものであることが明らかとなるのである。

ところで、跋文そのものは崔錫鼎、李國華、柳遇昌の三名が連名して署名しているものの、崔錫鼎の文集『明谷集』に跋文の全文が掲載されていることから、この跋文は崔錫鼎個人が起草したものと見て間違いまいであろう。¹⁸⁾

崔錫鼎（仁祖二十四（一六四六）年―肅宗四十一（一七一五）年）は、字は汝和、号は明谷という。家門は全州崔氏であり、祖父は、清軍の第二次侵略丙子胡乱（仁祖十四（一六三六）年）に際して、清側と「講和」することを唱えた領議政の崔鳴吉である。崔錫鼎の家門は党派としては西人に属していたが、西人は肅宗九（一六八三）年に老論と少論に分裂し、彼は少論に属した。崔錫鼎の存命中に、老論、少論、南人の党派は熾烈な争いを繰り返したが、彼は国王肅宗の信任厚く、都合八回にわたり朝鮮政府最高首職である領議政を務めている。奎章閣本作成の時期は、領議

政（肅宗三十四年の七月に再任している）と共に、弘文館、藝文館、春秋館、観象監の長官を兼務していた（通常、弘文館、藝文館、春秋館、観象監の長官は領議政が兼務することになっていた）。

李國華は、字は子章、全義李氏の出身である。彼は、仁祖八（一六三〇）年に生まれて、顯宗四（一六六三）年の文科に及第し、刑曹参判（堂上官、刑曹の次官にあたる）にまでのぼった人物である。観象監正となった年月については不明であるが、奎章閣本が完成した翌肅宗三十五年に七十五歳の生涯を閉じている。¹⁹⁾ 柳遇昌の来歴については不明である。

以上のような来歴を持つ人物たちが連署した理由は、「乾象圖」や「坤輿圖」のような天文図や国土図は、天文・暦数・地理等の事務を掌る官衙である観象監（書雲監とも言う）が管理するものであり、また、これら屏風が国王肅宗の御命によって作成されたために、観象監の最上官等が連記したのである。観象監の次官である「観象監正」の李國華と柳遇昌は、肅宗三十四年九月の時点で、既に退官していたため「前観象監正」となっている。すでに退官した二人が連記したのは、彼らが現任であった時に「乾象圖」、「坤輿圖」模写の御命が下ったためであろう。

ところで、奎章閣本の世界図の部分は、上記の三名が描

いたものでないことは当然である。朝鮮王朝では、通常王室関係の絵画は圖書署で作成されるものであるが、崔錫鼎の跋文を見る限りでは、実際に描画を担当した者の詳細は不明ながら、奎章閣本は圖書署の署員ではなく、観象監で描いたものようである。しかし、李燦氏の研究によれば、出典は明らかにしていないものの、「絵入り『坤輿萬國全圖』」は……当代の名畫家金振汝が描いたものである」としている²⁰。そもそも描画入り『坤輿萬國全圖』の作成者を金振汝であるとしたのは、金良善氏が嚆矢であると考えるが、そこでも明確な史料の出典は明らかにされていない。金振汝自身、生没年も未詳であり、且つ観象監や圖書署に所属する画員であったのかどうかということも不明である。そのため彼が本図を描いたという明確な根拠はない。

この崔錫鼎の跋文によって奎章閣本が作成された状況がほぼ明らかとなるのであるが、前述したように描画入り『坤輿萬國全圖』は、奎章閣本以外に博物館本と文化館本の二点の現存が確認されているのである。また奎章閣本は、写真版とはいえ、写真に写る描画入り『坤輿萬國全圖』は、博物館本、文化館本のいずれでもない。つまり描画入り『坤輿萬國全圖』は、これまでのところ三点も作成されていたということが明らかになるのである。これら三点は同時期に描かれたものなのか、或いは全く異なる時期に作成され

たものなのであろうか。この問題を解明するために次項では、現存する三点の描画入り『坤輿萬國全圖』中の崔錫鼎の跋文を比較しながら、奎章閣本、博物館本、文化館本それぞれの来歴と関連について明らかにし、併せて三点の作成の経緯についても考察していきたい。

三、他本との比較から見た奎章閣本作成の経緯

前述したように、奎章閣本、博物館本、文化館本はいずれも写本である。しかし、奎章閣本、及び文化館本が直接絹地に世界図や文章が書かれているのに対して、博物館本だけは、紙に描かれているという相違点がある²¹。また、三点ともに写本であるにもかかわらず、描かれているポルドーネ図法の世界図の形態と内容については、ほぼ同じである²²。しかし、崔錫鼎の跋文の字句については、微妙な相違を見せているのである。以下に崔錫鼎の跋文の相違点を列挙してみたい。

相違の第一点は、跋文の行数である。奎章閣本と文化館本が十四行であるのに対して、博物館本は八行しかない（なお、博物館本の第八幅には跋文以外にマテオ・リッチの「論地球比九重天之星遠且大幾何」が十行にわたって併記されている。そのため同本の第二幅目には原刻版『坤輿萬國全

圖』中のリツチの序文のみが十九行にわたり記載されている。第二点は、文体である。奎章閣本と文化館本が全行楷書で書かれているが、博物館本は流麗な行書である。第三点は、人名である。奎章閣本と文化館本は、跋文の署名として崔錫鼎、及び「前觀象監正」の李國華と柳遇昌、都合三名の名前が見えるが、博物館本は崔錫鼎一人だけしか記載されていない。

第四点は、文字の相違であり、都合二カ所ある。奎章閣本をもとにして指摘すれば、一カ所目は、第二行十九字目である。奎章閣本と文化館本が「作」となっているのに対して、博物館本は「各」となっている。この相違点については、崔錫鼎の文集『明谷集』に、「西洋乾象坤輿圖二總序」と題する全く同じ跋文が掲載されており、それによれば同箇所は「各」となっている。第二行十九字目が「各」であっても、或いは「作」であろうと意味が通じないわけではない。しかし、訓読などから推察するに、この部分の文字は「作」ではなく、「各」が的確であろうと考える。次に文字の相違する箇所は、十二行目の第六字目である。奎章閣本と文化館本が「九」となっているのに対して、博物館本が「八」となっている。

以上、崔錫鼎の跋文における相違点を指摘したが、これらを参考にして奎章閣本、文化館本、博物館本それぞれの

成立の経緯を推察してみれば次のようなことが言えるのではないかと考える。

奎章閣本は正本として、博物館本は副本として、両本はおそらく同時に描かれたものである。正本と副本の違いは、奎章閣本が絹地、博物館本が紙であるという材質の違いによっても明らかであるし、文字の書き方が、奎章閣本が楷書、博物館本が行書によって書かれていることから明らかである。また奎章閣本と博物館本が同時に描かれたのではないかという点については、両本ともに第二幅から第七幅までの世界図とその周辺に書かれた「天地儀」、「南北両半球図」等の記載部分が全く同じ形と内容をとっていることから窺えるのである。推測するに、崔錫鼎は完成した副本である博物館本の世界図を見て、そこに彼が直接跋文を墨書したのである。前述したように、崔錫鼎の文集『明谷集』掲載の跋文が博物館本と全く同じ文言であることから、その点は肯首出来ることである。そして、崔錫鼎が跋文を墨書したのが、まさに肅宗三十四年八月であったために、彼はその年月を記載したのである。

しかし、副本であるべき博物館本をもとにして、崔錫鼎の跋文を正本の奎章閣本に転載した者が、誤って「各」とすべきところを「作」としてしまった。意味が通じないわけではないが、同じ行の六字前に「作」の字があることか

ら誤認したのであろう。そして、跋文を転載した者たちが、正本である奎章閣本を国王に献上する時期を勘案した時、おそらく「八月」では献上不可能のために、この部分は翌月の「九月」と書き改められたものと推測するのである。

そして、問題となるのが文化館本である。この世界図については、献上品である奎章閣本の世界図とその周辺部分があまりに密集していたために、新たに書き直されたものと推察するが、なぜこうした措置がとられるようになったのか全く不明である。但し、文化館本は、奎章閣本の崔錫鼎跋文の「誤記」をそのまま継承しているために、奎章閣本を底本にして作成されたものと推察される。文化館本が描かれた時期は、跋文署名者の一人である李國華が翌肅宗三十五年に死去しているために、奎章閣本の完成後ほどない時期に開始され、翌年に李國華が死去する前に完成した可能性もあるが、おそらくは肅宗三十五年以降、ある程度の年月を経た後に描かれたものであり、一七五〇年頃には完成されていたであろうと推察される。

それでは、奎章閣本を描くに際して、その底本となった地図はどのようなものであったのか。次にその問題について考察を加えてみたい。

四、奎章閣本の原因

さて、崔錫鼎の跋文によれば、描画入り『坤輿萬國全圖』が作成された契機は、肅宗三十四年春に、觀象監が国王肅宗にアダム・シャルルが作成した「乾象圖」を模写して進呈したところ、肅宗から「坤輿圖」も模写して、それを「乾象圖」に添えるよう命じられたためであった。

そのため觀象監で所蔵する「坤輿圖」の中から、従来の「平面の上に地を方形にあらわしたものではなく」、「西土の説によれば……地球は一大円圈で示され、南北には湾曲した経線が、東西には真直な緯線が入っている」世界図を選んだという。そしてその選ばれた「坤輿圖」こそ、「崇禎初（一六二八年）」に「西洋人湯若望」が作成した「坤輿圖」であるというのである。つまり、奎章閣本に見る世界図は、崇禎初年に湯若望（アダム・シャルル）が作成した「坤輿圖」をそのまま模写したものであると、崔錫鼎は述べているのである。

以上のことから、奎章閣本は、アダム・シャルル原作の「乾象圖」の模写本と一対にするために、肅宗三十四年春に国王の命令によって、アダム・シャルルの「坤輿圖」をもとにして觀象監で模写されたものであることが判明するのである。しかし、ここで新たな問題が惹起されてくる。

朝鮮肅宗三十四年描画入り『坤輿萬國全圖』攷（鈴木）

それは、崔錫鼎が跋文の中で、模写した世界図はアダム・シャルが「崇禎初年（一六二八年）」に作成した「坤輿圖」であると明記しているが、奎章閣本に描かれている世界図は、図中の動物・海獣等の挿画を除いて、世界図の輪郭、図中の注記等どれをとつてもマテオ・リッチの万暦三十年原刻版『坤輿萬國全圖』と同一なのである。この点については、これまでの研究によれば、崔錫鼎が跋文の中で「利瑪竇」とすべきところを、「湯若望」と誤認したのであるうとしたり、さらには、この世界図の中には動物や海獣等の挿画が描かれているところから、奎章閣本の原図となっていた世界図こそ、これまでその現存が明らかにされていなかった万暦三十年から同三十六年の間にマテオ・リッチによつて彩色された描画入り『坤輿萬國全圖』であろうと結論付けたりしたのである。果たして奎章閣本の原図そのものは、アダム・シャルの作品とするのは崔錫鼎の誤認であり、マテオ・リッチが描いた世界図であると結論付けてよいのであろうか。この問題を探る手掛かりとして、当時政府の最高責任者であつた領議政崔錫鼎の西学に関する知識について見ていきたい。

まず始めに崔錫鼎の西学の知識とは直接関係するものではないが、彼が跋文の中で、奎章閣本に先立つて「乾象圖」を模写したと記述している点から確認しておきたい。この

「乾象圖」とは天文圖のことであるが、この時模写された「乾象圖」は、『増補文獻備考』卷三、「象緯三」の（肅宗）三十四年觀象監進湯若望赤道南北總星圖「条によれば、「崇禎元年」に湯若望が作成した『赤道南北總星圖』のことであり、さらに同図は、肅宗三十四年に觀象監で模写された事実をも伝えている。こうした事実をとつてみても、崔錫鼎の跋文の内容は、当時の状況をかなり正確に伝えていることが明らかとなる。

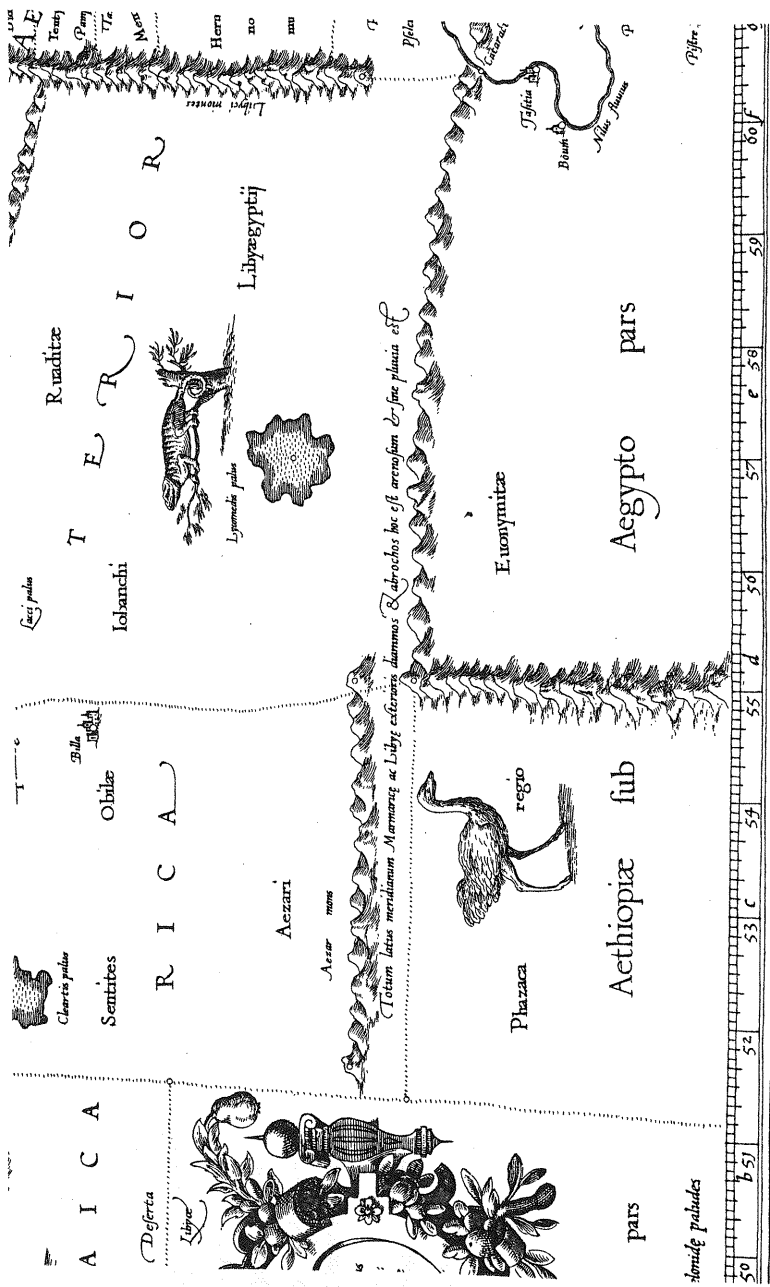
さらには、崔錫鼎の『明谷集』を一見すれば、彼が西学、特に西洋の曆算学や天文学に造詣が深かったことが窺われる。なぜならば、彼は曆算学や天文学に関する文章を『明谷集』卷八の「序」や、同書卷十一の「銘」、或いは同書卷十三の「書牘」に書き残しているからである。その中でも特に、肅宗九（一六八三）年に友人の李世龜（号は壽翁、一六四六―一七〇一）に宛てた長文の書簡の中で、しばしば西洋の曆算学について言及している。そしてその書簡では「西洋曆書十四冊」、或いは「時憲曆湯羅諸人修造、適在崇禎之初」等の文言が見えることから、崔錫鼎は、この時期既に中国で刊印され、朝鮮政府でも採用を検討していた「時憲曆」に関する『崇禎曆書』、或いはその改編書である『西洋新法曆書』中のいくつかの書籍は閲覧していたと考えられる。『崇禎曆書』、及び『西洋新法曆書』は、主にアダ

ム・シャルルやジャコモ・ロー(Giacomo Rho、漢名は羅雅谷、一六二四年入華→一六三八年)が中心となって著述・編纂されたものである。そのため崔錫鼎は、アダム・シャルルに關してある程度の知識は持っていたものと考えられる。⁽²⁸⁾

また崔錫鼎は、『明谷集』卷十一「雜著」の「宇宙圖説」で、地球上の「上下四方」の世界である「宇」と、それ以外の「天地之外別有天地萬物」の世界である「宙」について所見を述べているが、そこで「近世利瑪竇地球之圖即亦字説也」というように、マテオ・リッチの世界図に關する見解を述べているのである。崔錫鼎のこの文言から、彼がマテオ・リッチのどの世界図であるかは不明ながらも、マテオ・リッチの世界図を閲覽していた事実を知ることが出来るのである。以上見てきたように、『明谷集』に見える崔錫鼎の西学に關する関心の高さと理解の深さを勘案すれば、崔錫鼎が完成された奎章閣本を初めて見た時、第一幅にある「坤輿萬國全圖」序文の著者である「利瑪竇」を知らなかったはずはなく、また跋文に「湯若望」と記述した時に、崔錫鼎は既にアダム・シャルルの著作の幾つかは読んでいたと考えられる。そのため、既に指摘されているように、崔錫鼎が「利瑪竇」とすべきところを「湯若望」と誤認したのであるという意見については肯首しがたいのである。それでは、奎章閣本の原本は、アダム・シャルルが作成

したものであろうか。崔錫鼎が言及した「湯若望」の「坤輿圖」の現存が確認されていない現状においては、推測の域を出ないのであるが、奎章閣本の原図を描いた者は、マテオ・リッチの『坤輿萬國全圖』を底本として、その余白部分に動物・怪獸・海獸・船舶等の挿画を描き入れたことだけは間違いないところであろう。しかし、そうした挿画がアダム・シャルルの創意によって描かれたものであるという決定的な根拠が不足してしており、こうした挿画は、マテオ・リッチによっても描かれた可能性は残っているのである。

なぜならば、既にマテオ・リッチが原刻版『坤輿萬國全圖』を作るに際して、オルテリウスやメルカトル等の当時西欧で入手可能であった何点かの「世界図」をもとにしていた、ということが明らかにされている。⁽²⁹⁾そしてマテオ・リッチが逝去する以前に、つまりマテオ・リッチが中国滞在中に入手できた当時の西欧「世界図」の幾つかには、奎章閣本に描かれている挿画と同じ図像が確認できるのである。⁽³⁰⁾奎章閣本に見える挿画の全てを確認したわけではないが、マテオ・リッチが中国に入華するに際して持参した「世界図」の中に奎章閣本と同じ挿画が見えることから(例えば図Ⅴ参照)、奎章閣本の原本の作成者としてマテオ・リッチの可能性を完全に否定することも出来ないのである。奎



(図V) メルカトール of 1578 年版『世界圖帳』のアフリカ大陸の部分図

朝鮮肅宗三十四年描画入り『坤輿萬國全圖』攷(鈴木)

章閣本に見える挿画が西洋の「世界図」や地理書、並びに博物書にいつ頃初出したのか、という問題については今後の検討としたい。

朝鮮王朝は、創建の当初から中国と冊封関係を結び、毎年数回にわたる冊封使節を明・清に派遣していた。こうした両国の関係は十九世紀末まで続く。彼ら使節は、政治的な目的のもので中国に派遣されていたのであるが、中国に滞在する間に、中国の書籍を含む数多くの文物を購入して帰国した。イェズ会士等が著述した漢訳西学書も、同じように彼ら使節によって大量に朝鮮にもたらされたのである。これら漢訳西学書は、使節に参加した人士の興味によって招来したものもあれば、天文・暦算関係の書籍のように、朝鮮政府の政策遂行上必要不可欠のものとして、国王の御命によってもたらされたものもあつた。朝鮮国王肅宗が「乾象圖」と「坤輿圖」の模写を命じた理由も、こうした点から理解しなければならないであろう。

現存する、しないに関わらず、イェズ会士等が作成した世界図の多くは、朝鮮にもたらされたはずである。招来した世界図を受容して、朝鮮の人々はどうのような世界図、或いは朝鮮国土図を描いていたのか、という問題については今後考察を続けていきたい。

おわりに

以上、ソウル大学校奎章閣で所蔵する写真に撮影された描画入り『坤輿萬國全圖』の形態とその内容を考察し、他に屏風に仕立てられて現存するソウル大学校博物館所蔵本と大阪南蛮文化館所蔵本の両本と比較検討しながら、それぞれの成立過程と来歴について推察を交えながら考察を加えてきた。その結果、次のようなことが明らかとなった。

ソウル大学校奎章閣が所蔵する写真に写された描画入り『坤輿萬國全圖』は、元來奉先寺が所蔵していた屏風に仕立てられた描画入り『坤輿萬國全圖』であり、この写真自体は、一九三二年十月に京城帝国大学付属図書館で開催された「朝鮮古地図の展覧」に出品された際に、奉先寺境内で撮影されたものではないかと推察した。

また、奎章閣本を始めとする現存の博物館本、文化館本の関係については、崔錫鼎の跋文中の字句の相違から、奎章閣本が原図模写の正本、博物館本がその副本であり、文化館本については、奎章閣本の世界図の部分があまりに込み入っているために、その後に書き改められたものではないかと推察した。

そして、奎章閣本の原図については、アダム・シャルの作成した「坤輿圖」である可能性が高いと推測したが、

朝鮮肅宗三十四年描画入り『坤輿萬國全圖』攷（鈴木）

同「坤輿圖」の現存が確認されていない現状においては、なおマテオ・リッチが作成した可能性も残るのである。

註

(1) マテオ・リッチの世界図、特に万暦三十年の原刻版『坤輿萬國全圖』に関する研究は、これまで多くの研究がなされ、優れた研究成果が挙げられている。その中でも特筆すべき研究成果として、洪煥連「考利瑪竇的世界地圖」(『禹貢』第五卷第三・四合期、一九三六年)、鮎沢信太郎「マテオ・リッチの世界図に関する史的研究」(『横浜市立大学紀要』一八、一九五三年)、船越昭生『坤輿萬國全圖』と鎖国日本…世界的視圖の成立」(『東方学報』四一輯、一九七〇年、同氏①論文)、海野一隆「明清におけるマテオ・リッチ系世界図」(山田慶兒編『新發現中国科学史資料の研究』京都大学人文科学研究所、一九八五年)を代表的なものとして取り上げることが出来る。また、『坤輿萬國全圖』諸本に関する総合的研究としては、万暦三十年の原刻本とも異なる明代の別刻本の存在を明らかにした川村博忠、オーストリア国立図書館所蔵のマテオ・リッチ世界図『坤輿萬國全圖』(『人文地理』四〇巻五号、一九八八年)が有効であり、これまでの内外の研究成果と問題点を簡潔にまとめている。本稿における『坤輿萬國全圖』に関する記述は、これら五人の諸先学の研究成果に負っている。

なお、一九六〇年代までのマテオ・リッチ世界図に関する各国の研究成果については、船越昭生「在華イエズス会士作成地図と鎖国時代の地図…『坤輿萬國全圖』『康熙圖』の評価・

従来の研究をめぐって」(『人文地理』二四巻二号、一九七二年、六七頁〜七四頁参照、同氏②論文)が詳細な研究整理を行っている。

ところで、本稿で考察の対象となるマテオ・リッチ世界図は、万暦三十年原刻版『坤輿萬國全圖』とそれ以降に作成された世界図となるため、万暦三十年以前に刊印されたリッチの世界図については詳論しない。万暦三十年以前のリッチの世界図については、上記の鮎沢信太郎、船越昭生、海野一隆各氏の諸論考を参照していただきたい。

(2) 『坤輿萬國全圖』の日本に及ぼした影響については、上記の鮎沢信太郎、船越昭生両氏の論考に詳しい。朝鮮における影響については、金良善「明末清初耶蘇會宣教師들이製作한世界地圖와 그韓國文化史上에 미친影響」(同氏『梅山國學散稿』所収、崇田大学校博物館、一九七二年)、船越昭生「朝鮮におけるマテオ・リッチ世界図の影響」(『人文地理』二三巻二号、一九七一年、同氏③論文)、李元淳「朝鮮実学知識人의 漢訳西学地理書 이해」(『한국어 전통지리사상』民音社、一九九一年)、姜在彦「朝鮮の西学史」(『姜在彦著作選』第四巻、明石書店、一九九六年、四〇〜五〇頁)、吳尚學「朝鮮時代와 世界地圖의 世界認識」(『地理學論叢』別号四三、ソウル大学校社会科学大学地理学科、二〇〇一年、一〇三〜一二〇頁)で少なからずふれている。しかし、いずれの論考も、原刻版『坤輿萬國全圖』が中国で刊行された翌年に朝鮮に招来したことから、朝鮮で初めて『坤輿萬國全圖』を紹介した李暉光や李漢・安鼎福等の主な実学者の地理観を述べるに止まっている。今後は、彼ら以外の朝鮮知識人がイエズス会士系世界図をどのように受容、或いは拒否していったのかと

いう問題を探っていく必要があるであろう。

- (3) 前掲、川村博忠氏論文参照。なお、オーストリア国立図書館所蔵の『坤輿萬國全圖』については、明代の別刻本ではなく、『清代改訂第一版』とする意見もある。青木千枝子「オーストリア国立図書館所蔵の『坤輿萬國全圖』について」、『汲古』二五号、一九九四年。

- (4) なお、マテオ・リッチの『報告書』によれば（本論におけるリッチの『報告書』については『中国キリスト教布教史』一・二巻「生田滋他編『大航海時代叢書』第Ⅱ期八・九巻所収、岩波書店、一九八二年」を参照した。なお、マテオ・リッチの『報告書』の版本については、註(9)を参照されたい）、『坤輿萬國全圖』が万暦三十年に刊印されたとき、刻工たちによって無断でもう一部の『坤輿萬國全圖』の版木が作成されたとのことである（同書、一卷、五一三頁）。これがいわゆる「刻工某刻版」といわれるものであるが、この「刻工某刻版」には本稿で問題とする動物・海獣・船舶等が独自に刻版されたというようなことはなかったようである。そのため、原刻版と「刻工某刻版」との内容の差異について、本論ではこれ以上論究しないこととする。

- (5) 『両儀玄覽圖』については、鮎沢信太郎「マテオ・リッチの両儀玄覽圖について」、『地理学史研究』Ⅰに所収、一九五七年）を参照。なお『両儀玄覽圖』の原刻版は、現在ソウル市内にある崇実大学校基督教博物館で所蔵しており、他に中国遼寧省博物館でも所蔵しているという。

- (6) 『両儀玄覽圖』の詳細については、別稿で論じたい。
(7) 『中国キリスト教布教史』第一巻（第四の書、第五章、四一五頁～一六頁）参照。船越昭生氏の①論文参照。

史苑（第六三巻二号）

- (8) 『中国キリスト教布教史』第二巻（第五の書、第一章、一六〇頁～六三頁）参照。

- (9) 船越昭生氏の①論文（六一六頁）参照。

マテオ・リッチ『報告書』の草稿本（原題は『イエズス会によるキリスト教のチーナ布教について』、原文はイタリア語）は、リッチの逝去直後にニコラ・トリゴー神父（Nicolas Trigault、漢名は金尼閣）によって編集され、一六一五年にラテン語で公開された。しかし、一九〇九年にイタリア語のリッチ手稿本がイエズス会ローマ文書館で発見されるに及んで、新たにヴェントリ神父（Tachi Venturi）によって編集されたものが *Opere Storiche del P. Matteo Ricci* 2 vols, 1911 である。船越昭生氏が利用されたリッチ『報告書』がこれにあたる。ところが、ヴェントリ神父は自らの編著が中国側資料との照合を欠いたまま公刊されたことに不満を感じ、この欠落を埋めるためにデリア神父（Pasquale M. D'Elia）に依託して出来上がった編著が *Fonti Ricciane. Documenti originali concernenti Matteo Ricci e la storia delle prime relazioni tra l'Europa la Cina, 1579-1615* 3 vols, 1942-1949 である。本書の邦訳が『中国キリスト教布教史』全二巻（生田滋他編『大航海時代叢書』第Ⅱ期八・九巻所収、岩波書店、一九八二年）である。筆者は、リッチ手稿本は未見であり、両編著の優劣を決める根拠を持ち合わせているわけではないが、本書では、デリア神父の『報告書』の邦訳を使用した。ところで、ヴェントリ神父の来歴については不明であるが、デリア神父はリッチ世界図研究の泰斗であり、編著刊行前にすでに *Il Mappamondo Cinese del P. Matteo Ricci* S.I. 1938 を上梓している。本書でも描画入り『坤輿萬國全圖』

を利用しているが、用いている世界図は北京歴史博物館が所蔵していたものである（同書、Tavola XXIX）。北京歴史博物館所蔵描画入り『坤輿萬國全圖』は、描画の部分でソウル大学校奎章閣所蔵本とかなりの相違を見せるものである。北京歴史博物館所蔵本、ソウル大学校奎章閣所蔵本共に、その作成にあたって利用した原図は同じものと考えるが、作成の年代については北京歴史博物館所蔵のものが新しいものと推測される。

なお、北京歴史博物館所蔵の『坤輿萬國全圖』は、現在行方不明であるらしい。しかし、同世界図は模写されたものが南京博物院で所蔵されているという。中国で所蔵するマテオ・リッチ世界図については、曹婉如他「中国現存利瑪竇世界地圖の研究」（『文物』一九八三年一二期）を参照されたい。

- (10) ところで、マテオ・リッチ自身は、絵画の才能に長けていたため（平川祐弘『マテオ・リッチ伝』一卷、平凡社、一九六九年、二八九頁〜九一頁参照）、自ら作成した『坤輿萬國全圖』中に挿画を描くことなどいとも容易いことであつたろう。但し、問題は後述するように、リッチが挿画を描くに際して、原画作成の参考となるためにどのような西欧の図書を利用できたのかという点にあるであらう。

- (11) ソウル大学校名誉教授李燦先生から直接伺った話によれば、奎章閣本は一九九四年頃に、当時奎章閣で特別研究員をしていた楊善景氏が書庫内の段ボールの中から現在の形態のまま「発見」したとのことである。なお、奎章閣本の閲覧に際しては、李燦先生から懇切な便宜をはかっていただきました。
- (12) 奎章閣本の存在が初めて日本に紹介されたのは、土浦市立博物館編『世界図遊覧…坤輿萬國全図と東アジア』（一九九六

年）誌上においてであらう。なお同書には、ソウル大学校博物館所蔵の描画入り『坤輿萬國全圖』を始めとして、日本国内外で模写された多くの『坤輿萬國全圖』が掲載されており、参考となる。

なお、韓国では奎章閣本の存在について指摘する諸論考は少なからず認められるものの（例えば、배우성『조선전기 국토관과 천하관의 변화』이리사、一九九八年、三七七頁参照など）、本格的に内容についてまで言及したのは、前掲の呉尚學氏の著書が初めてであらう。

ところで、現存するソウル大学校博物館所蔵本や大阪南蛮文化館所蔵本に関する研究状況については、次の通りである。ソウル大学校博物館所蔵本については、韓国における古地図研究に際しては、必ずと言っていいほどに言及されるものではない。内容に至っては、金良善氏の註(2)論文を出るものではない。また、大阪南蛮文化館所蔵本については、その存在は確認されながらも、唯一、Minako debergh: *La carte du monde du P. Matteo Ricci (1602) et sa version Cœtème (1708) conservée à Osaka*, *Journal Asiatique*, tome 274, 1986, があるのみである。しかし、ミナコ・ドウベル氏の研究は、詳細を究めるものであり、この研究によって大阪南蛮文化館所蔵本の内容はほぼ明確になったと言える。本稿の作成にあたっても参考とした部分は多い。ミナコ・ドウベル氏の論文の存在については、大阪大学名誉教授海野一隆先生からご教示をいただきました。

- (13) 秋岡武二郎氏は、京城帝国大学附属図書館における展示会前に、後述するように奉先寺で所蔵していた描画入り『坤輿萬國全圖』を見学している。なお、前掲のミナコ・ドウベル

氏の論文によれば、奉先寺所蔵のものはすでに一九一八年にトロップ (Troppe) 神父によって *Kora Magazine*, september 1918. の中で簡単な紹介がなされているという(四五頁参照)。

(14) 前掲、ミナコ・ドゥベル氏の論文(四二八頁) 参照。

筆者は、文化館本については未見である。そのため本稿では船越昭生氏①論文の掲載誌に別刷りされた文化館本の写真とミナコ・ドゥベル氏論文文中に掲載された同本の写真版を利用した。

ところで、奎章閣本と文化館本を比較すると、卵形図法による世界図の部分が、奎章閣本では六幅、文化館本では八幅にわたって描かれていることが明瞭である。そして文化館本は、世界図の部分を新たに八幅に区切って作成したために、太平洋上の海獣が奎章閣本や博物館本とは異なり、その位置を微妙に移して描かれていることも明らかである。

(15) 奎章閣本は、奉先寺がかつて所蔵した描画入り『坤輿萬國全圖』であるということは、すでに呉尚學氏前掲書(一二四頁)で明らかにされている。しかし、そこでは何ら論拠を示さずに言及しているため、本稿では煩雑と思われたが、二三の論拠を示して奎章閣本の所蔵先を明らかにしてみた。

なお、奉先寺所蔵になる描画入り『坤輿萬國全圖』は、一九五一年の朝鮮戦争の際に灰燼に帰したという。そうした意味からも、奎章閣本の存在は重要と考えられる。

(16) 原刻版『坤輿萬國全圖』中のマテオ・リッチの序文では、世界図は五色によつて色分けされると述べている。文化館本の彩色については、前掲、ミナコ・ドゥベル氏の論文によると、白・赤・緑・黄色の色が見えるという(四二八頁参照)。

博物館本は実見したところ、他に淡青色がぬられている。

(17) なお、奎章閣本の世界図の内容については、万曆三十年原刻版『坤輿萬國全圖』とほぼ同様であるために、本稿では詳論することは控えたい。万曆三十年原刻版『坤輿萬國全圖』の世界図の内容については、前掲の船越昭生氏①論文、川村博忠氏の論文を参照されたい。

(18) 崔錫鼎の文集である『明谷集』は、景宗元年(二七二年)刊印になる東洋文庫所蔵のものを使用した。本論で後述するように、博物館本の跋文は、崔錫鼎だけが署名している。このことから、跋文の起草は崔錫鼎がおこなったものと見て大過ないであろう。ところで、崔錫鼎の跋文には、本稿で見られるように奎章閣本の成立を知る内容と同時に、彼の世界観を窺うことができる内容が記されている。崔錫鼎が抱いていた世界観がどのようなものであったのか興味深い問題であるが、本稿では紙数の関係上ふれないこととする。

(19) 李國華については、『癸卯四年式年榜目』『國朝文科榜目』影印版、第二巻、太學社、一九八八年)を参照。

(20) 李燦『韓國の古地圖』(汎友社、一九九一年)、『解説篇』(三四九頁) 参照。

(21) 金良善、前掲論文(一八三頁) 参照。

(22) 奎章閣本の材質については、秋岡武次郎氏の「昭和七年四月、京城帝大医学部教授中村拓博士の案内で著者は同寺(奉先寺のこと―著者註)に赴いたが、これは絹地に描かれた地図で、縦一八二〇ミリ、横六五〇ミリ二曲と、六三〇ミリ六曲の大きな八曲屏風に仕立てられている。なお、同種のマテオ・リッチの世界図屏風を京城帝大でも所蔵していた。」(同氏『世界地図作成史』、河出書房新社、一九八八年、一二〇

頁参照）という文章から、絹地であることがわかる。また文化館本については、前掲のミナコ・ドウベル氏の論文により絹地で出来ていたことが明らかである（同氏、前掲論文、四二八頁参照）。博物館本については、直接の調査により紙に書かれていることが判明した。

ところで、奎章閣本以外の大きさは以下の通りである。博物館本は、縦一七二センチ、横五三一センチ。文化館本は、縦一七二センチ、横四二四センチ（横の長さには、マテオ・リッチの序文と崔錫鼎の跋文の二枚分が含まれていない。ミナコ・ドウベル氏の前掲論文、四三〇頁参照）となっている。（23）三点の模写された世界図の内容については、一部山脈が欠落していたり（例えば、博物館本ではアフリカ大陸ナイル川右岸の山脈が欠落している）、地名表記の場所がずれていた部分はあるものの、全く異なるような表記の仕方はしていない。

（24）李國華の逝去年については註（19）の同書を参照。

ところで、文化館本の作成年を一七五〇年頃とする理由は、文化館本の屏風の裏には、当初から貼られていた天文図があつたが、その中に一七四四年記銘のイエズス会士ケーグラ（Ignatius Kogler、漢名は戴進賢、一七一六年入華〜一七四六年）の天文に関する文書が記載されているためである。推察するに、一七五〇年頃に何らかの理由で「天文図」が作成されることになり、それとあわせて文化館本も新たに作成されることになったのではないかと考えられる。文化館本の天文図に関しては、ミナコ・ドウベル氏の前掲論文（四三三頁）参照。

なお金良善氏は、博物館本について、奎章閣本の後年の写

本であるとするが（同氏、前掲論文、一八三頁参照）、その可能性は低いと考える。

（25）李燦氏の前掲書『韓國의 古地圖』の「解説篇」（三四九頁参照）によれば、「乾象圖」の作成者は湯若望であり、「坤輿圖」の作製者は利瑪竇であるとしている。なお、吳尚學氏の前掲書（一二二頁〜一二三頁参照）によれば、「一六二八年にアダム・シャルがマテオ・リッチの世界地図を重刊したものでなければ、崔錫鼎がマテオ・リッチの世界地図をアダム・シャルが製作したものと誤認したか、どちらかであろう。しかし、現在までアダム・シャルの世界地図製作に関する記録がないことから見れば、後者である可能性が高い」としている。

（26）船越昭生氏の①論文（六一六頁）、金良善氏の前掲書（二二〇頁）、全相運『韓國科学技術史』（高麗書林、一九七八年、三四四頁）参照。

（27）『増補文献備考』卷三、象緯三、儀象二、「（肅宗）三十四年觀象監進湯若望赤道南北總星圖」の条。

同条では、アダム・シャルの作成した『赤道南北總星圖』の内容に関して説明している。その中で、同図が「崇禎元年」にアダム・シャルによって作成されたことが明記されている。これまでアダム・シャルの「乾象圖」については、ミナコ・ドウベル氏が前掲論文で、パスカル・デリア神父の論文である『The Double Stellar Hemisphere of Johan Schall von BellPekin, 1634, dans Monumenta Serica, vol.18, Rome, 1959』を引用して『赤道南北兩總星全圖』であると結論している（四四七頁参照）。また、吳尚學氏は前掲書において、アダム・シャル作成の天文図は、『赤道南北兩總星

『星圖』と『星圖』しかないとした上で、後者の作成年が一六三四年であるため、『乾象圖』は『星圖』のことであると結論している(一二三頁参照)。筆者は『赤道南北總星圖』については未見であるが、同図は Maurice Courant, *Catalogue des livres chinois, coreens, japonais, etc.* 3 vols, 1902 に著録されており、パリ国立図書館に現存していることが確認できる。なお同カタログによれば、同館には『赤道南北總星圖』の他に『赤道南北兩總星全圖』も所蔵していることが確認できる。『乾象圖』が『赤道南北總星圖』、『赤道南北兩總星全圖』、『星圖』のいずれであるのかという問題については、同館の両図を一見すれば水解するであろう。ちなみに、一六三四年版の『赤道南北兩總星全圖』は F. Richard Stephenson, *Chinese and Korean Star Maps and Catalogs, The history of Cartography 2-2*, University of Chicago Press, 1994, に(五七〇～五七一頁参照)写真が掲載されているため、その大要をつかむことが出来る。

(28) 崔錫鼎が政權担当者の一員として活躍していた一七世紀後半から一八世紀初頭の時期は、朝鮮が中国で実施している「時憲曆」を採用するために、燕行使節を通じて積極的に天文・曆算書を導入しようとしていた時期であった。一七〇〇年前後の「時憲曆」採用のための朝鮮政府の動向については、姜在彦『朝鮮の西学史』(『姜在彦著作選』第四卷、明石書店、一九九六年)を参照(八八～九五頁)。

(29) ところで、アダム・シャールの作成した「世界図」については、これまで地球儀用舟型世界図が知られている。しかし、その世界図は、奎章閣本の世界図とはかなり相違しているものである。アダム・シャールの地球儀用世界図については、

海野一隆氏の「湯若望および蔣友仁の世界図について」(『人文地理学の諸問題』大明堂、一九七八年)を参照した。なお、アダム・シャールは「崇禎初年」当時は西安に滞在しており(魏特著『湯若望傳』商務印書館、一九四九年、一一九頁～一二二頁参照)、描画入り『坤輿萬國全圖』がアダム・シャール作成の世界図であると仮定すれば、なぜアダム・シャールが西安で世界図を作成しなければならなかったのかという新たな問題も出てくる。

(30) 船越昭生氏の①論文(六六六頁～六七〇頁)参照。

(31) 『墨瓦臘泥加』大陸の余白に描かれた「カメレオン」、「サイ」や「象」等の実在の動物、或いは「グリフォン」や「スウ」等の空想上の動物については、一六〇〇以前に刊行された西欧の世界図や動物誌等に全て散見される挿図である(例えば、メルカトルの一五七八年版の世界図帳等)。また、海獣や船舶の挿図は、十六・十七世紀の西欧の世界図に必ずと言っていいほど挿入される図像であるが、奎章閣本の海獣については、オルテリウスの世界図に一部散見されるが、大部分は不明である。また船舶については全く同一のものを見つけたことが出来なかった。

(付記)

本稿の作成にあたって、ソウル大学校奎章閣所蔵写真版描画入り『坤輿萬國全圖』の所在、並びにその閲覧に際して、ソウル大学校名誉教授李燦先生から懇切な御教示を賜りました。また、イエズス会士系世界図に関する文献等については、大阪大学名誉教授海野一隆先生から再三にわたりまして御丁寧な御指

朝鮮肅宗三十四年描画入り『坤輿萬國全圖』攷（鈴木）

導を賜りました。感謝申し上げます。また奎章閣本の閲覧に際しては、韓国国立中央博物館学芸員の吳尚學氏、博物館本の閲覧に際しては、ソウル大学校博物館学芸研究官の陳準鉉氏、高麗大学校大学院生の宮崎善信氏の協力を得ました。感謝申し上げます。

なお、本稿は文部科学省科学研究費による研究成果の一部である。

（富山大学人文学部教授）

On the “kunjomangukjido (world Map)” Created in Korea, Sukchon 34

by SUZUKI Nobuaki

The “Kunjomangukjido” is a large-scale map of the world, originally created by the Jesuit priest and scholar Matteo Ricci in Beijing in 1602. Well-known as an important historical document in the fields of both cartography and geography, its scale and accuracy were unmatched by virtually any map existing at the time anywhere in the world. This world map was recognized not only in China but in Korea and Japan as well, and had a significant influence on these countries.

As of now, not a single example of the existence of the original 1602 Beijing version of the “Kunjomangukjido” has been confirmed in Korea, but this map was copied in Korea in 1708 (Sukchon34), and there is yet another version of the “Kunjomangukjido” with drawings of animals, sea creatures, and ships inserted into open spaces on the same world map. There are versions of this “Kunjomangukjido” with drawings, made into folding screens, at both the Seoul National University Museum and the Nanbanbunk a-kan Museum in Osaka, Japan. The same world map, as shown in the photo, can also be found in the Kyujangak.

In this paper, as a result of examinations of these three world maps, we determined that the document in the Kyujangak collection is the original copy created in 1708, and that the document in the Seoul National University Museum is a duplicate copy created in the same year. We also determined that the version in the Nanbanbunka-kan Museum’s collection was not created in 1708, but was created at some later date.